ZOSHIGAYA MISSIONARY MUSEUM

雑司が谷旧宣教師館だより

第6号
1998年 1月25日発行

豊島区立雑司が谷旧宣教師館
〒171 東京都豊島区雑司が谷1-25-5 ☎FAX(03)3985-4081

豊島区立 10.6.29 郷土資料館

5万人目の入館者！

1月10日（土）昼すぎ、平成元年の1月26日の開館以来、入館者が5万人目に達しました。数日前よりカウントダウンを始め、職員一同心待ちにしておりました。

ところが予期せぬ大雪で除雪に奮闘、人の気配を感じて顔を上げると、裏門から大勢の人たちが入って来られました。（困った！数えられない、と一瞬動揺）しかし、団体でお見えになったようなので尋ねてみると、総勢38名ということでした。

あと28名で5万人だったのですが、どなたが5万人目の方なのか残念ながら特定できません。けれど実際に5万人に達したので、全員に5万人目のお客様になっていただくことにしました。

「安田まほろば会」の皆さんです。会員の方々も5万人目ということで、新年早々縁起が良いと喜んでくださいました。ご来館ありがとうございます。

「安田まほろば会」の方々には、雑司が谷旧宣教師館ポストカード（※）を記念にお持ち帰りいただきました。

5万人目の入場者になりました！
1/10 たいへんうれしい記念になりました
ありがとうございました。
安田まほろば会 一同

※このポストカードは「過去の宣教師の足跡を今に伝え、かつ都内でも希少となった、明治期の木造洋風建築であるこの雑司が谷旧宣教師館の存在を広く多くの人々に伝えてください」と、マッケーレブがこの旧宣教師館を建てたと同時期に、北区中里に開校した女子聖学院中学校・高等学校の小倉義明校長先生に寄贈していただいたものです。モノトーンのペン画は、横浜にお住まいの画家・湯村京子先生の作品です。

◎「存在を伝えてくださる方！」事務棟までお越しください。（尚、部数に限りがありますので、無くなりましたらご了承ください。）

―― 現存する都内最古の宣教師館 ――

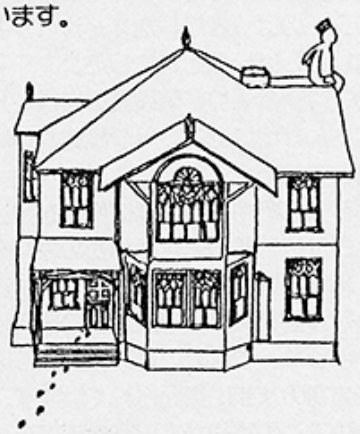
インブリー館（明治学院）

昨年の12月6日（土）、港区白金台の明治学院大学で、明治学院創立120周年記念の「インブリー館シンポジウム」が開かれました。これは宣教師の住宅として明治22(1889)年頃に建てられたインブリー館が過去から現在、どのような歴史的・空間的な広がりの中に位置してきたのか、そして今後どのように活かされていくのか、研究者・文化財修復家・建築家等のそれぞれの視点から話し合われた会でした。

この雑司が谷旧宣教師館同様に、港区指定有形文化財となっているインブリー館は、1994年から建物調査と修復工事が行われ昨年9月に終了しました。

この復元工事で特筆すべきことは、雑司が旧宣教師館館は建築当初に復元していますが、インブリー館の場合は学院のインブリー館の使い方に合わせて一部整備しながら、当初に近い形に復元するという方向をとったそうです。

しかも今後も同窓会館として使用するので、設備・内装も今に合ったもので現在も住めるような状態になっています。



インブリー館の特徴は、下見板張りの外壁、シングルスタイルで、19世紀末のニューイングランド地方の典型的な木造住宅です。カーペンターゴシック様式を用いながらも、外観では柱と壁を使い分ける日本風の部分も見られるそうです。日本の明治文

化の１つの表現と、ニューイングランドの文化の表現が融合していることに意義があるということでした。

◆シンポジウムの講師は、次の方々でした。

鈴木博之氏（東京大学教授）
内井昭蔵氏（滋賀県立大学教授）
高村功一氏（文化財建造物保存技術協会
　　コライ堂設計監理事務所所長）
中島耕二氏（キリスト教史学会会員）

□ □ □　職員のひとりごと　□ □ □

この雑司が谷旧宣教師館に似ていると言われるインブリー館を、かねてより見学したいと思っていましたところ、一般公開のシンポジウムがあると聞いて胸を踊らせて参加しました。

インブリー館は港区白金台にある明治学院の、なだらかな坂をのぼりつめた所に、チャペル・記念館とともに落ち着きのある趣で建って居りました。それぞれに優れたデザインでしたが、殊にインブリー館を最初に見た時の感動は忘れられません。

外観は下見板張りの外壁で、こげ茶とベージュのコントラストのはっきりしたオイルペンキ塗りの美しい佇まいにしばし見とれました。

内部の床は寄木張り、階段裏の模様やドアのノブ等に大工さんが用いたゴシック様式が垣間見られるということでした。

シンポジウムの中で、実際に修復を担当された方より「インブリー館の修復は当初の建築を大事にしながら、絶対に譲れない部分は残しかつ現在生活できるような設備を入れ生きた建物に復元した。」とうかがいました。ちなみにこの雑司が谷旧宣教師館は、建築当初のままに復元されています。

あらためてこの雑司が谷旧宣教師館を見直し、白と緑の配色の外観は素朴だけれど、敢えて身びいきを許してもらえるのなら、わたしはやはりこの旧宣教師館のほうが素敵だと感じました。

（インブリー館を見学して．1997.12.6　Y．S）

来館者の声

このような立派なものを残された地元の方々の熱意に感服しました。豊島区が行政として関わられたことも良かったと思います。

壊してしまえば何もなくなったしまいますが、この建物は何が大切なのか教えてくれているように感じました。

もう少しくわしい資料を展示されることを希望します。

数少ない東京の建築の記念碑として大切にしてほしいです。（12.19 文京区　H．Iさん）

（この方は日本女子大の「平塚らいてう展」の帰りに立ち寄られたそうです。平塚らいてうは大正３年頃巣鴨に居住し、豊島区ゆかりの文化人のひとりです。....もう少し詳しい資料の展示に努めて行きます。）

花ごよみ

寒さ厳しい冬がやって来ました。雑司が谷旧宣教師館の大きなユリの木やケヤキ・サクラといった落葉樹は葉を落としましたが、常緑樹であるツバキやキンモクセイは寒い冬でも青々とした葉に赤い実をつけております。今回は、冬の庭を彩る実の美しい「マンリョウ」を紹介したいと思います。

「マンリョウ」

科　名　ヤブコウジ科
　　常緑広葉小低木
花　期　７　月
実熟期　１１月～翌２月
適　地　半日蔭　関東以南

７月、枝先に白色の小花をつけ、秋から冬につややかな赤い果実が熟し、美しい緑葉とともに春まで越冬します。

旧宣教師館の庭の片隅にウサギの眼のように可愛い、真っ赤に熟した「マンリヨウ」の実が日差しを浴びて輝いて居ります。是非ご覧ください。反り目

【編集後記】新年早々の二度の大雪は、郷土資料館からの除雪の応援で大助かり。建物は雨樋が雪の重さで若干曲がり、応援職員が梯子に登り応急処置。大小の樹木も初冬の枝落としの甲斐あって被害も僅か。いざという時必要なもの、「人手と普段からの備え」これを肝に命じ、来る１月26日の『文化財防火デー』に臨みます。（　文責　浜地　）